

〔東大寺續要錄寶藏〕勅封藏開檢目錄 北藏略○中 木地厨子一脚 納略○中 同六○雙石一筥略○中

建久四年八月廿五日

〔新猿樂記〕予廿餘季以還歷觀東西二京今夜猿樂見物許之見事者於古今未有就中略○中 獨雙六、中

略 都猿樂之態鳴嘯之詞莫不斷腸解頤者也

〔柳亭記上〕雙六をうつ時の口遊并追まはし

廢れし遊びは雙六なり予種彦柳亭をさなき頃も雙六をうつ者百人に一人なりされど下り端を

知らざる童はなかりしが近年はそれも又廢れたりさて雙六をふるときの口遊にいふことあ

りし五四をふれば五四々々と啼くは深山の時鳥三六なれば三六さつて猿眼又重五をよする

ときさつとちれ山櫻五は櫻の花に似たりそれがニツ並びていづるは櫻のちるさまなればな

り是等は父にならひて予が童のときいひつ、雙六をうちしなり今おもへば此口遊びはふる

き事なり三六さつて猿眼は飯をたく法どうく火にちよろちよろ火親が死ぬとも蓋とるな

三尺さがつて猿ねぶりといふ諺のもちり口なるべし

俳諧世話燒草一名世話盡し承應三年土佐國雙六の話二くい坊主の布施好さつとちれ山櫻し

しめせ坊主聲の藥にぐつと呑んで實をはけ六尺をどれ沖のこのしろ二いちにほうきはうりか

ひの升五ぐいちかす酒髭につくしらぐは馬にめす十人ざりは曾我兄弟一いちちんいふぞ和田

のよし五もりさ波や志賀の都下シモ作りは船が速いぐにん夏の虫五ぐし腹のたつばかり五に

くま太郎三三ては藤四郎その間に月はぶらく五二

至來集延寶四年胡兮撰 さつとちれの雙六盤山櫻冷笑子とありさつとちれ山櫻のみ予がおぼえ

し如くなりぐにん夏の虫といふは予もいひたるを忘れ此冊子を見て思ひ出したり此ほか此

書に鰻之目手打かどや棒さしおりは追曲など雙六にかつらひし詞を寄たり此手打といふ